

3-3 環境と伝統を再生する～ タイ・チョン族の試み

タイ語と系統の異なるチョン語

先住・少数民族チョン族（Chong）は、タイ国内の総人口が約4,000人と云われ、カンボジアと国境を接する東部チャンタブリ県のカオキチャクト（Khaokhichakhut）、ポンナムロン（Phongnamron）両郡に集中して居住している。クメール王国が支配していた頃から一帯に住んでいたことを示唆する記録も存在する（Premrirat 2007: 81）。チョン族の話すチョン語は、オーストロアジア（Austroasiatic）系言語のモン・クメール（Mon-Khmer）語族、ペリル（Pearic）語派に属し、タイ語とは系統が異なる。

チョン族は、かつて採集狩猟経済を営んでいたが、今では、多くの世帯がドリアン、ランブー



チョン族の食卓。森の恵みをふんだんに使い、辛さはタイ料理をしのごく

タン、マンゴスチンといった換金果物を栽培・販売して、安定した現金収入を得ている。少数をのぞいて採集・狩猟を行わなくなったものの、薬草をはじめとする非木材林産物（NTFP）について豊富な知識を持ち、自宅の周辺に草木を育て、食用や薬用に給している。60才～70才代のチョン族の人びとの話では、子どものころ、一帯では、チョン族以外の民族を見かけることはなく、みんながチョン語を使っていた。そのうち、中国人商人やカンボジア人労働者が訪れ、やがて定住するようになり、第二次世界大戦が終わると、タイ政府が標準タイ語の習得を奨励

しだした。チョン族の村にもタイ人教師が派遣され、学校などで子どもたちにタイ語を教えはじめた。学校でチョン語の使用を禁じられることもたびたびで、次第に、親たちは、家庭でチョン語を使うと子どもたちのタイ語習得が遅れ、学業に差し障りが生じると考えるようになった。そのため、チョン語は、家庭でも使われず、次世代に継承されなくなった。現在、チョン族は、全員がタイ語を話し、チョン語が流暢に話せる人は200人足らずで、20才以下でチョン語が話せるチョン族はいないと云われる（Premrirat 2007: 81）。

小学生向けチョン語授業の開始

1990年代の末、チョン族は、タイ国立マヒドン（Mahidol）大学の研究者たちの言語調査に協力するうちに、自分たちの言語、文化、アイデンティティが消滅の危機にあることを嘆き、再生させる意図のあることを伝えるようになった。研究者も協力を申し出て、これが「チョン語再生プロジェクト」の出発点となった。

2000年、チョン族住民の意識調査が行われ、95%以上が言語と文化の再生を望んでいることが分かった。そこで、数度にわたって村で会合が開かれ、これまで無文字言語であったチョン語を書きとめるために、タイ文字を改変して、タイ語とは異なるチョン語の特徴を表現す

る表記法が考案された。また、地元の小学校の理解を得ることに成功し、正規授業の一環として、子どもたちにチョン語を教える構想が固まった。ふたたび研究者と協力して、チョン語授業カリキュラムを開発し、このカリキュラムにのっとして、2002年、ワットクロンプルー小学校の3年生を対象に、週2回のチョン語授業が開始される運びとなった。現在、ワットタキアントーン小学校の4～6年生で週3回のチョン語授業が行われ、チョン族ではない子どもたちも参加している。



タイ文字を改変して考案したチョン語表記。「パサー・チョン」(チョン語)と読める

ことばを守る、自然を守る

2007年に始まったワットタキアントーン小学校の授業では、高学年になると屋外での授業を奨励し、子どもたちは、近隣の国立公園などに出かけ、自然環境を体感しながらチョン語を学ぶ。また、特別講師として招かれた薬草師といっしょに近隣を散策しながら、食用・薬用に使える植物を採集し、チョン語とタイ語の双方で名称や効能を学習する。子どもたちは、自分たちの生活空間の中で採集できる植物を自分の目で見、手で触れ、ときには舌



チョン族の薬草師(右端)を招いた小学校の学外授業。自然環境に接しながら伝統の知恵を学ぶ(2011年9月)

で味わいながら、チョン語の知識を身につける。環境教育の場としては、クロンプルー村に共有林が存在する。この共有林は、村人であればだれでも入って、食物や薬草を採取することができる。ただし、木を切ることは禁じられており、どうしても必要な場合には、木の精霊の許しを得るために特別な儀式を行わなければならない。共有林の周囲に防火用の側溝を掘り、色分けした布を樹木に結びつけることで保全の大切さを訴えるなど、さまざまな工夫がこらされ、取水・散水ポンプの電力は、太陽光パネルでまかなっている。子どもたちが、共有林でチョン族の持つ森の知識を学び、植林活動によって森の再生を手伝うこともある。

チョン語は復活するか？

チョン語再生プロジェクトの最大の成果は、チョン族が少数民族としての自覚と自信を回復したことだろう。この点は、古老、若者、子どもたちに一致した認識で、小学校の教員など、チョン族以外の人たちからも聞こえてくる意見である。チョン語再生プロジェクトは、タイ国内で同様の状況に直面する東部トラート県のガソン族(Kasong)、東北部チャイアプン県のニヤクル(Nyahkur)族から注目された。また、これらの言語



チョン族を訪ねるタイ南部のムスリム系住民。大半が家庭でパッターニー・マレー語を話す(2007年10月)

や民族ほど危機的な状況にはないが、東北部スリン県の北クメール（Northern Khmer）話者や南部諸県でパッタニー・マレー（Pattani Malay）語を母語とするイスラム系住民もチョン族の村を訪問し、チョン語再生プロジェクトについて学んだ。今では、これらすべての民族が、それぞれの状況に見合ったやり方で、言語、文化、生物を保全・再生するプロジェクトを立ち上げている。

チョン語再生プロジェクトの当初の目標には、チョン語が地域社会でふたたび使われるようになることがあがっている。しかし今のところ、チョン語が学校以外の場面で活発に話されているようには思えない¹。クロンプルー村で古老と話をする、チョン語の話せる配偶者間でもチョン語を使っていない。チョン族ではないが、再生プロジェクトに好意的なある教員は、「チョン語はたぶん消滅するだろうが、かつてチョン族という民族が存在したことを記録・記憶しておくことが重要だ」と語った。チョン族にとっては、プロジェクトの最終目標よりも、現在の地域社会において、チョン語・文化の価値への合意が形成されていることが重要なのだと思われる。

<参考資料：英語>

Malone, Denis. 2005. Where do We Go from Here? The Challenge and Prospects of Language Revitalization in South East Asia. In Languages and Cultures for Rural Development. Nakorn Pathom, Thailand: Institute of Language and Culture for Rural Development, Mahidol University at Salaya 202-220.

Premrirat, Suwilai. 2007. Endangered Languages of Thailand. International Journal of Sociology of Language 186 75-93.

<参考資料：日本語>

土井利幸（2011）『森の再生、言葉の再生～生物・文化多様性の回復を目指すタイ・チョン族の挑戦～』

東京：メコン・ウォッチ http://www.mekongwatch.org/PDF/Chong_booklet.pdf

（土井利幸）

1. Malone (2004: 214-216) は、その他の課題として、(1) 限られた人たちだけでなく、地域社会全体でプロジェクトに取り組むこと、(2) チョン語が家庭でどの程度話されているか、とくにチョン語授業を受けた小学生が家庭でどの程度チョン語を使用しているのか調査すること、(3) 公的な支援、とりわけ財政を安定的に確保すること、(4) 地域学習センターなど個々の活動の成果を検証することをあげている。